DOJIN
R18
成人向け
ユリコネクト!
YURI CONNECT!
Re:Dive
リダイブ
～ハラペコ王女様とツンデレ猫娘の百合えっち生活～

ペコリーヌ
キャル
ユウキ
コッコロ

第一話　妖しい魔道具

この世界――アストルムには魔力によって動作する『魔道具』が数多く存在する。魔法の音響盤や携帯できる遊戯器のような市井の人々の生活を豊かにするもの、王城に敷設された魔法障壁のように国家軍事に利用されるもの、果ては時空を超えるようなものまで、まるで最初から答えがあったかのように洗練されたアイテムがいくつも転がっているのだ。

そんな『魔道具』の大半は当然人の手で制御できるものばかりであるが、稀に暴走して想定外の効果を及ぼし使用者に害を為すような代物もある。そうしたものは破壊、あるいは封印されるのが世の常ではあるが、知らず知らずのうちに封印が解かれ市井に出回るという事態が発生するのも常であった。

これはそんな『魔道具』のひとつが引き起こした事件をきっかけにプリンセスとプリンセスが繋がる物語である。

『みんなでおいしいものを食べること』を目的に結成されたギルド【美食殿（びしょくでん）】。構成メンバーはいつもお腹ペコペコの美少女剣士ペコリーヌ、仲間を強化する不思議な能力を持つ記憶喪失の少年騎士ユウキ、彼を導く十一歳にして大人顔負けの抱擁力と母性を備えた巫女の美少女コッコロ、そして最後に育ちが悪いので口も悪けりゃ態度も悪いツンデレ（笑）

猫娘魔法使いキャルの四名である。
「誰がツンデレ（笑）だ！？　ぶっ殺すわよ！」
天を仰いだキャルの怒りの声がギルドハウス中に響き渡った。
「あ、あの、キャルさま？」
心優しきエルフの少女コッコロが目をパチクリさせ、おびえた様子でキャルを見やる。
「キャル、カツアゲー？」
「ダメですよキャルちゃん。温泉旅行はコッコロちゃんとユウキくんが行くって決めたじゃないですか？」
ユウキの無責任発言に続き、ペコリーヌがお姉さんらしく嗜（たしな）める。
先日コッコロが商店街の福引で『三泊四日オーエド温泉旅行ペアチケット』を引き当てた。コッコロとしては【美食殿（びしょくでん）】のメンバー全員で行きたいところであったが『ペアチケット』なので旅行に参加できるのは二人までだ。話し合いの末にチケットを引き当てたコッコロと彼女の『主さま』であるユウキが旅行へ、ペコリーヌとキャルは留守番することになった。そして今まさに出発しようとしているところだったのである。
「カツアゲなんかするか！　……どっかで悪口言われた気がしただけよ」
「ああ、それならいいんですけど」
「よろしいのでしょうか……？」
バツの悪そうな顔をするキャルと能天気な笑顔を浮かべるペコリーヌを横目にコッコロはこめかみから脂汗を流した。
「そんなことよりも、旅行だからって浮かれてばかりいちゃダメよ！　コロ助はしっかり

してるから大丈夫だろうけど……ユウキ！」
　いつもながらぽややんとした気の抜けた表情のユウキを指差してキャルは言葉を続ける。
「あんたはいっつもいっつもフラフラどっか行って、すぐに迷子になっちゃうんだから気をつけるのよ！　わかった？」
　口調こそきついがキャルなりにユウキを心配しての発言である。素直になれない一面があり誤解を受けやすいが、心根は優しい少女なのだ。
「おいすー」
「ちょおーっ！　真面目に聞きなさいよ！」
　気の抜けたようなユウキの返事にキャルが突っ込みを入れた。本人は至って真剣だが、ユウキもユウキで自然体が過ぎて誤解されやすかったりする。
「それではペコリーヌさま、キャルさま、行ってまいります」
「おみやげかってくるー」
　こうしてコッコロとユウキは温泉旅行へと出かけて行くのだった。

　コッコロとユウキが旅行へ出かけた日の夕暮れ時、キャルはランドソルの街中にある魔導書店でひとりショッピングを楽しんでいた。ギルドメンバーが二人不在ということもあり、彼女らが帰るまでギルド活動を休止して各々好きに過ごすことにしたのである。
「あいつらと一緒も悪くないけど、たまにはひとりでのんびりしたいもんね」

ちなみにペコリーヌは普段より時間をかけた料理にチャレンジすると言ってギルドハウスに居残っている。

「おっ、これ少し前に発禁になった魔導書じゃない……買っとこ♪」

珍品を入手して上機嫌で店を後にするキャル。その背後に怪しげな影が迫っていた。具体的に言うと、出るところは出ている肉感的な長身ボディを水着と大差ない露出度のド派手ボディスーツに包みこみ、魔女らしいとんがり帽子を被った自称ぐうかわサイツヨの魔法少女の影が。

「だーれだ？」

キャルの視界が柔らかな手のひらに覆い隠された。その声を聴いた瞬間、キャルの脳裏に走馬灯（そうまとう）のように『あの』忌まわしき診療所で刻まれた凄惨な記憶が次々と浮かび上がる。

「おぉびゃああああぁあっぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！　やめでぇっ！　はなじてぇっ！　がえじてぇぇぇっ！　もおどこもわるぐなぃからあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

トラウマを呼び起されたキャルは目や鼻から汁を垂れ流しながら幼児退行したようにけたたましく泣き喚いた。衆目が一斉に集まり、声をかけた女性はひどく焦った様子でキャルをなだめる。

「お、お、お、おちけつ！　……じゃなくて落ち着いてー！　ごめん、ごめんね。そんなにびっくりするとは思わなかったからさ。何もしない、何もしないよー。ほーら深呼吸しようか。ほら、ひっ、ひっ、フゥー……ひっ、ひっ、フゥー……」

声をかけた女性はアウトローたちの間で名の知れたギルド【トワイライトキャラバン】のメンバーで【蒐集家（コレクター）】の異名を持つナナカ。【美食殿（びしょくでん）】のメンバーとは一応面識があるのの

だが、知り合うきっかけとなった診療所で口にするのも憚(はばか)られる治療をされたせいでキャルからは特に恐れられているのだ。
「お、落ち着いたかにゃ？」
「うん……」
涙やら鼻水やらでぐしゃぐしゃになった顔をハンカチで拭いてやるとようやくまともに会話ができる状態になった。
「さっき声をかけたのは診療所は関係なくて、ナナカちゃんの個人的なお願いを聞いてほしかったんだ」
「お願い？」
「さっき買った魔導書を譲ってほしいの！　もちろんタダとは言わないよ！　買った値段の三割増し……いや倍の額、いやいや赤い彗星と同じ三倍出すから！　その魔導書は、私にとって必要なものなのだーっ！　どれくらい必要かというと合体ロボの三号機に乗るデブと同じくらい？　んーやっぱりライバルキャラの妹くらいかな？　それくらい必要で……」
想像の翼を広げたようなデザインの眼鏡越しに瞳を潤ませながら、大仰な身振り手振りでわけのわからないことを早口でまくしたてるナナカ。『三割増し』というフレーズにキャルは若干頬を引きつらせたが冷静に考えを巡らせる。ナナカが言ってることの半分も理解できないが、とにかく彼女にとっては必要なものなのだろうと判断した。それに買い値の三倍貰えるのはかなり魅力的な条件だ。
（何より……これ以上関わってまた酷い目に遭いたくないわ）

「よっしゃー！　出血大サービスだ！　こいつも持ってけドロボー！」
キャルが黙り込んでいるのを報酬に不満があると勘違いしたナナカはその豊満な胸の谷間から麻袋を引っ張り出した。
「見よっ！　ナナカちゃんがさる貴き御方から譲り受けたレアアイテム！　『隠花の宝珠』！！」
麻袋から取り出されたのは鮮やかなピンクの宝玉を包み込むように金色の装飾が施された手のひらサイズの魔道具だった。花の蕾かイチジクの果実を思わせるデザインで装飾の隙間から艶やかな輝きを放っている。その輝きの源こそ『隠花の宝珠』と名づけられた由縁であった。
「宝玉の中で花が咲いてる……綺麗……」
「そうそう、そーなんす♪　この宝玉に刻まれた術式が光って花みたいに見えるんだよね。宝玉の中に花が隠れているから『隠花の宝珠』ってわけ。魔道具としての効果は範囲内にいる味方の魔力をほんのちょっぴりブーストするっていうありきたりのもので、効果範囲も狭いから実用的じゃないんだけどデザインは結構いいと思うんだけどな～……どう？　どう？　欲しくない？　欲しいよね？　欲しいでしょ？　欲しいと言え！　イエーイ！」
「……欲しい」
ナナカがオタク特有の圧を掛けてきていたが、キャルはそのせいで返事をしたわけではない。『隠花の宝珠』の放つ妖しげな輝きに魅入られていたからに他ならなかった。

「それで貰ってきたんですね」
ギルドハウスでペコリーヌと夕食を済ませた後、キャルは早速『隠花の宝珠』をリビングの棚に飾ることにした。
「本当に良かったんでしょうか？　ひょっとしてすごく高価なものなんじゃ……」
「あたしだって少しは気にしたけどさ、ナナカもタダで手に入れたものらしいからいいんじゃないの」
実際ナナカが言ったことは事実だ。正確には悪徳貴族から奪った盗賊から【トワイライトキャラバン】が奪ったわけだが。
「じゃあ問題ないですね♪　わたしもこの魔道具気に入りました。おいしそうで」
「何でもかんでも食べ物に繋げるんじゃないわよ！」
コッコロとユウキが不在ではあるが、ペコリーヌとキャルはいつもと変わらない日常を過ごしていく。本来ならば、きっと明日もそのはずだった。
二人が床に就いた頃、リビングの暗闇で『隠花の宝珠』が宝玉を包んでいた煌びやかな装飾を花弁のように展開し、胎動するがごとく妖しげな光を放ち始める。ナナカはもちろん、前の持ち主である盗賊も、さらに前の持ち主である悪徳貴族も、この魔道具の本当の名を知らなかった。
この魔道具に隠された真の名は『淫花の宝珠』。
その昔、ランドソルの貴族の間で流行したとされており、特殊な魔力の波動を放射し、その魔力を浴びた者を発情させる。そして魔力を浴びる時間が長くなるほどに淫化が進んでいくという代物だ。倦怠期の夫婦や恋人の性生活の改善を使用目的としていたが、意中

の相手を手籠めにするために悪用されたり、誤作動や暴走事故が多発したため、開発者の黒歴史として特殊な封印を施されたはずだった。そのうえ調査しようにも文献がほとんど残存しておらず、【蒐集家（コレクター）】とあだ名されるナナカの能力を以てしても、『淫花の宝珠』の真価を見抜くことができなかったのだ。

特殊な封印が施されていたのだから当然だろう。

しかし望む望まないに関わらず、今宵キャルによって封印は解かれてしまった。

彼女は夢を見る。

姫と秘めたる情事に耽り、ままならないからママにならない、神々しくも生々しく姫と繋がる淫らな夢物語。

第二話　キャルのひとりえっち

起きたくない……完全に目は覚めているけど、ベッドにうずくまってもう一度寝直したい気分。

あんな夢を見るなんてどうかしてるわ。まさか、あたしがペコリーヌのやつと……

ユウキとコロ助が旅行に行って、昨日からあいつと二人きりだっていうのに顔を合わせるのが気まずいじゃない。

窓辺から差し込んでくる朝の陽射しは爽やかなのに、あたしの気分は陰鬱そのもの。これなら怖い夢を見たほうがまだマシだわ。あー、起きたくない。起き上がりたくない。

とはいえ、このままウダウダしていたらいつぞやみたいにペコリーヌが窓をぶち破って部屋に突入して来るかもしれないわよね。そうしたら今度はぬいぐるみの首が飛ぶだけじゃ済まないかもしれない。

あたしは観念してベッドから起き上がって軽く頬を叩く。

大丈夫……大丈夫よ。たかが夢じゃないの。あたしは全然気にしてない。気にしてないから……！

自室の扉を開けると階下から美味しそうな甘い匂いが漂ってくる。今朝はコーンポタージュかしら。あたしは夢のことは一旦忘れて、朝食に意識を傾けることにして階段を降りた。

食卓にはすでにサラダや食パン、刻んだフルーツを入れたヨーグルトなんかが並んでる。

ユウキとコロ助がいない分、普段より量は少なく感じるわね。
「〜〜〜♪」
ペコリーヌはまだ台所で調理をしているみたいで、あたしに気づかないで上機嫌に鼻歌なんか歌っちゃってる。今朝は長い髪を頭の上のほうで結んだポニーテール姿。食卓を原木から作った時や田植えの時、体を動かす場合はよくこの髪型にしてるわよね。
台所を手際よく左右に動くたびに揺れるペコリーヌの綺麗なポニーテール。猫じゃらしに釣られるみたいに、あたしはいつの間にかペコリーヌの背後に立っていた。卵が焼ける匂いやコーンポタージュ甘い匂いに交りながら確かに嗅ぎ分けられる女の子の甘酸っぱい体臭、目が眩むほど白く綺麗なうなじ、貴さを隠しきれない背中のラインがあたしの鼓動を高鳴らせる。
「あっ、キャルちゃん♪　おいっ――」
「ひゃあああああぁぁぁっーーーーーーっ！！」
近づきすぎた。振り向いたペコリーヌの顔が思ったより近くて、びっくりしたあたしはみっともない悲鳴を上げて尻もちついた。
「大丈夫ですかキャルちゃん？」
「い、い、いきなり振り向くんじゃない！　ぶっ殺すわよ！」
自分の疚しさと恥ずかしさを誤魔化すために、あたしはついつい威嚇してしまう。
「もうキャルちゃんったら、いつもより早起きさんだと思ったらお腹空いてるんですね♪　もうすぐ朝ごはんできますから座って待っていてくださいね」
ペコリーヌは怒るでもなくニコニコ顔であたしの手を取って助け起こすと、朝食の準備

に戻っていく。
　あたしは握ったペコリーヌの手の感触の残滓を噛み締めながら席について朝食が運ばれてくるのを待った。
「お待たせしました！　さあ、食べましょう！　いただきます」
　コーンポタージュ、半熟の目玉焼き、そして最後に並んだ皿があたしのぼんやりとしていた意識を一気に吹き飛ばす。二人分でいつもより寂しいはずの食卓の中央にいきなり肉の居城が築かれた。子供の胴回りくらいありそうな肉の塊がジューシーに焼かれ、オニオンベースの香ばしい匂いが朝の爽やかな雰囲気を濃密で重厚なものに豹変させる。他の皿がサラダやスープという朝食らしい軽めのメニューであることを考えるとあきらかに異様だわ。確かにペコリーヌはたくさん食べるけど、魔物やら珍味が絡まなければメニューのバランスはいつも考えられているのに。
「あんた！　朝っぱらからこんな重たいもの食えるわけないでしょ！　ユウキもコロ助もいないんだから少しは考えなさいよ！」
「大丈夫ですよ♪　ほとんど私ひとりで食べるつもりですから。キャルちゃんには……こうです」
　でかい肉の塊にナイフを入れるとじゅわっと抵抗なく切れて断面にほど良い赤みを帯びているのを見せつける。これだけでも充分に食欲をそそられるわ。バターを塗った食パンにレタスとスライストマトをのせて小指の先ほどの厚さに切った肉を重ねる。さらにいい具合にとろとろ半熟の目玉焼きをのせ、食パンで蓋をしてちょっぴりゴージャスなサンドが完成した。

「これはやばいですよ☆」
「いただきます……」
噛んだ瞬間、あたしの脳内は真っ白になった。
外はカリっと中はもちっとしたパンに挟まれた厚み以上に肉感がやばいジューシーなお肉にあたし好みの半熟の黄身が絡みついて舌の上で蕩ける。さらにシャキッとした新鮮なレタスと瑞々しい甘味たっぷりのトマトが味を引き締めてくれてるみたい。口いっぱいに広がる幸せのハーモニー。
「おいしい……！」
「でしょう！　卵も、お野菜も、お肉も、具材は全部朝採ったばかりですから」
卵と野菜はわかるけどお肉も？
……まあいいわ。おいしいし、深く考えるのはやめることにしましょう。
ペコリーヌもあたしの倍以上に分厚い肉をパンに挟んで食べ始める。
いつ見てもおいしそうに食べるわねこいつ。
それにおやつ感覚で大食い大会に参加するほどの暴食で、魔物だろうと食べれそうなものならなんでも胃袋に収める悪食だけど、不思議と食べ方は綺麗なのよね。大男がやっと食べれそうな量の肉がどんどんペコリーヌの胃の中に消えていっても、やっぱりお姫様だけあってどこか品がある気がする。なんとなくあいつが食べているところに、その唇に目が離せないでいた。あたし自身の口の中の感動も忘れて食べながら、活き活きと食事を続けるペコリーヌをジッと見つめていた。肉汁に塗れた唇や口内から時折覗く濡れた舌、血色の良い頬の肌艶に、あたしの胸の奥が熱くさせられる。

「キャルちゃん、ほっぺたに付いてますよ」
あたしの頬に触れるペコリーヌの滑らかな指先が少しだけ渇いた半熟の黄身のかけらを掬いあげるとそのまま自分の唇と舌で搦めとった。
「あああああぁぁぁ〜〜〜！」
「キャルちゃん！？」
舐めた。黄身のかけらを、キミノカケラを、あたしを舐めた。
全身の血液が沸騰したみたいに体が熱くなる。目の前がブルブル震えてペコリーヌの顔がぼやけて見えない。自分の感情がままならない。とにかくこの場を離れなきゃいけないことだけは確かだった。
自分の皿に乗った料理を猛スピードで口の中に放り込んで、がむしゃらに咀嚼して水で一気に胃袋に流し込む。あたしってこんなに早く食べれたんだ。
「キャルちゃん、あの……？」
「ごちそうさま！　寝るっ！」
心配そうに声をかけてくれるペコリーヌの顔をまともに見ることもできないまま立ち上がったあたしは、右回れして階段を駆け上り自分の部屋に逃げ込んだ。そのままの勢いでベッドにダイブし、枕に顔をうずめて悶え狂う。
バカかあたしは！？　ペコリーヌはいつも通りご飯を食べていただけなのに、変な夢を見たせいで、妙に意識して、奇行に走るなんて……どうかしてるわ！
……なんであたしはこんな気持ちになっちゃってるの？
自分の頬に指を這わせると、ペコリーヌが触れたところにじんわりした温もりが残って

いる気がした。ほんの一瞬触れただけなんだからそんなわけないのに、あたしの指先にペコリーヌの温もりが乗り移ったような錯覚に陥ってしまう。

バクバク騒がしい心臓の鼓動を抑えつけるために、温もりが乗り移った指先で左胸をそっと撫でた。意識してたわけじゃない。薄手の寝間着越しに敏感な突起に刺激を与えてしまう。

こんなことしちゃダメなのに……僅かな罪悪感を抱えながら、二度三度と指先を往復させる。気持ちいい……ダメだけど、もっと刺激が欲しい。

あっさり快楽に負けたあたし。今度はほんのちょっぴり爪を立てて突起を擦ってみる。強くなった刺激に喉奥からこみ上げてくる声を枕で必死に抑えつけた。でも抑えられたのは声だけで、あたしの指は理性の枠を離れて乳首をカリカリ擦り続ける。布越しじゃだんだん満足できなくなって汗ばんだ寝間着の内側に忍び込む。固く勃起した乳首を摘まんで、擦って、引っ張って、頭のてっぺんから尻尾の先まで駆け抜ける快感。あたしの脳内ではペコリーヌに触られているような気分になってきている。そして下腹部がグッと締まって熱いものがジュワっと湧いてくるのを認めてしまったら、そこに手が伸びるのは当然だった。

あたしは相変わらず枕に顔をうずめた四つん這いの姿のまま、下の寝間着を下着ごと膝上くらいまでずり下ろす。素肌が外気に触れたことで濡れた部分の熱量が余計に際立つのを感じた。ペコリーヌの温もりが乗り移った指先で濡れた部分をそっと撫でてみると、あたしの脳内のペコリーヌはいよいよ具現化してきて、生々しい幻聴まで生成し始める。

『キャルちゃん、気持ちいいですか？』

もう一方の手で胸を揉んで、濡れた割れ目を擦るスピードを上げながら、妄想ペコリーヌが耳元で囁く。いや、触っているのはあたし自身なんだけど、頭がびりびり痺れて現実と妄想の境がなくなってきている。顔をうずめた枕はいつの間にかペコリーヌのおっぱいの谷間に変わっていて、さっきキッチンで嗅いだあの甘酸っぱい体臭が鼻孔をくすぐり、あたしは谷間に舌を突き出したり吸いついたりした。

『もうキャルちゃんったら甘えん坊さん♡』

窒息しそうな息苦しさを感じながらもあたしはおっぱいから顔を離すことができない。余計に鼻息を荒くして、割れ目を触る指を増やしていた。中指で割れ目を広げ、人差し指をその中に沈める。中身を掻き出すように指を動かすとくちゅり、くちゅりとエッチな水音が耳にこびりついてくる。

『キャルちゃんのエッチな音、やばいですね♡』
そんなこと言わないでよ。
恥じらう意思とは裏腹に、指を余計に激しく動かして、水音が響く間隔はだんだん短くなっていく。頭の中はペコリーヌのことで満たされて、だんだん呼吸が乱れてきて、体中の毛穴から汗が噴き出す。
『ここはどうですか？』
妄想ペコリーヌに導かれるまま、無意識にふりふり揺れていた尻尾の先を握ってみたら、乳首とは異なる快感を得られることが理解できた。強すぎない力で包み込んでねじるようにしごくともっと気持ちいい。長年付き合ってきたはずの自分の体なのにこんな秘密があるなんて思いもしなかった。
しこしこ♡　しこしこ♡　しーこしこ♡　しーこしこ♡
尻尾をシコシコするたびに背筋が甘く痺れて半開きの口から唾液が溢れてしまう。
しこしこ♡　しこしこ♡　くちゅくちゅ♡　くちゅくちゅ♡
両手でそれぞれ性感帯を刺激しているだけでも今まで経験したことないくらいの快感が湧き出てくるのに、妄想ペコリーヌがより過激な進言をしてきた。
『尻尾でおまんこを擦ったら、もっと気持ちよくなれますよ♡』
尻尾を股で挟むようにして前後に動かしてみた。ふわふわの毛並みがクリトリスから割れ目を経てお尻の穴まで同時に刺激し、さらに柔らかくて濡れたおまんこ肉の感触が尻尾を包み込む。
ごしごし♡　ごしごし♡　ごしごし♡　ごしごし♡

狂ったような快感があたしの残り僅かな理性を掻き消した。妄想ペコリーヌに煽られるままに、尻尾を股間にぎゅっと挟んで何度も何度も激しく擦り付ける。

ぐちゅり♡　ぐちゅり♡　ぐちゅり♡　ぐちゅり♡

ペコリーヌのおっぱい枕を甘噛みして声を抑えながら全身が不思議な浮遊感に支配された。頭の中が真っ白になって目の前が明滅を繰り返す。ひと際大きな波が押し寄せてきて、下腹部の熱が溢れ出した。

「んんぐっっ！　うぐむむッン〜〜〜〜〜〜〜っ♡」

枕で口元を抑えていたのに部屋中に響き渡るあたしの恥ずかしい唸り声。体中の震えが止まらない。あたしの内側を震源としてベッドを大きく軋ませた。

初めての感覚。これが『イク』ってことなのかしら？

仰向けになって荒くなった息を整える。天井が妙に霞んで見えるわね。

んん？

てか、今の声まさかペコリーヌのやつに聞こえてないわよね？　大丈夫よね？

枕で声抑えていたから多分大丈夫。下まで聞こえてるってことはないわ。

でも、もし下にいなかったら？　例えばあたしの部屋の前にいたら……？

あたしのこんな姿を知ったら……あいつは、ペコリーヌはどう思うんだろう。

失望するかな？　それとも……

そんな想像をしていたら、せっかく鎮まりかけていたのにまた疼いてきちゃったじゃない！

イッたばかりの体は最初よりも敏感だったけど、気持ち良さには慣れたみたい。汗ばん

だおっぱいを撫でながら、さっきまでの余韻で濡れている割れ目に指をひっかける。もう指一本は余裕で入るわね。試しに中指も一緒に差し込んでみた。

まだちょっときついけど、割れ目を押し広げていく感覚が気持ちいい。少し痛みもあるんだけど、それが癖になる。

親指で円を描くようにしてクリトリスを擦りながら、指二本で割れ目の入り口をとんとんしていく。ちょっぴり感触が他とは違う所に触れるとビリリと電流が流れたみたいに気持ち良かった。

ちょっと怖い。でも好奇心が勝ってしまい、そのままそこを刺激し続けることに決めた。

好奇心は猫をも殺す、なんて言葉があるらしいけど、あたしは獣人族だから関係ないわ。

くいくいって指を曲げてざらっとした部分をさっきより強めに、同じテンポで圧迫を繰り返してみると、おしっこしたくなるような感覚がまじりながらもゾクゾクする快感が下腹部全体に広がっていった。閉じていたはずの両脚をはしたなく開いて、あたしは夢中でそこを刺激し続ける。お腹の底からいやらしい声を吐き出しそうになるのを空いた手で必死に口を抑えて耐えた。自分の手で封じているのになんかレイプされているみたい。理性は必死に抵抗しているのに外的な要因があたしをレイプしている気がする。でも実際は抵抗も、凌辱も、自作自演のセルフレイプよね。

あたしは初めて経験する快感に涙さえ浮かべて悦びながら、そのスポットに覚え込ませるようにリズムを刻む。感度がだんだん磨かれてきて、濃い液が内側から染み出してくるのがわかった。全身に緊張が走って、またあの感覚が来る予感。

「ンンッ♡　んおっ♡　んおおぉっ……♡　やっ……んぬぁ……んく……むふぐぐぅぅ〜

〜〜〜〜〜〜っ♡」

急に全身がふわっと浮き上がったかと思うと、足に力が入らなくなってガクガクと痙攣を始める。口元を抑えていた指の隙間から悲鳴に近い声が漏れ出してしまった。

ペコリーヌに声が聞かれていないかも心配だったけど、それ以上に今はお腹の奥からじんわりと広がっていく余韻に浸っていたい。

あたしはしばらくの間、涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにしながら大きく呼吸して痙攣が収まるの待った。

スッキリできたおかげで頭の中にかかった靄は少し晴れたはずよね。少しだけふやけた指の間で糸を引いている手のひらを眺めつつ、あたしは自分自身にそう言い聞かせる。

心地よい疲労感から半脱ぎの寝間着もそのままに目を瞑り、あたしの意識は闇に落ちていくのだった。

第三話　ペコリーヌのひとりえっち

キャルちゃん大丈夫でしょうか？

朝食の後片付けを終え、リビングでひと心地ついたわたしは今朝のキャルちゃんの様子を思い返します。何だか挙動不審でとにかく変でした。

でもその原因が、もしかしたらわたしにあるような気がして、彼女に訊ねることはできませんでした。だってわたしも今朝は変だったから。

エッチな夢を見たせいかもしれません。キャルちゃんとあんな破廉恥なことをするなんて、今まで一度だって考えたこともなかったのに。

妙に疼いた体を鎮めるために、朝早くから魔物を狩って体を動かしました。朝食としては重いけど、おいしいお肉料理をたくさん食べれば変な気持ちも晴れると思ったんです。

だけどキャルちゃんがわたしをあんな目で見るから……思い出したらまた体が熱く疼いてしまいます。

キッチンで朝食の支度をするわたしの体を舐めまわすような視線。不快感はなく、むしろ愛おしさすら感じるその視線に犯され、わたしは気づかないふりをしながらも確かに悦んでいました。特にうなじから背中にかけて、ペロペロ細かく舐められるような感覚に背筋を甘い痺れが駆け抜けた気さえします。

結局は今気づいた風を装って振り向きましたけど、もしあのまま気づかないふりを続けていたらどうなっていたんでしょうか？

もしかしたら後ろからおっぱいを鷲掴みにされていたかもしれません。自分でも大きいほうだという自覚のあるおっぱいを両手で揉みしだいてみます。キャルちゃんに愛撫されることを妄想しながら。

キャルちゃんはあれで臆病なところがありますから、最初はきっとおっかなびっくりした感じで触ってくるかもしれません。布地越しに、脆い果実の皮を剝くように、慎重に、細心の注意を払って、おっぱいの輪郭を指でなぞります。そっと乳房に指を沈めて、優しく擦って、少しもどかしい感覚に、乳首がちょっぴり布地に浮き上がってきました。目聡いキャルちゃんがこれを見逃すわけありませんよね。細長い指で、カリカリ、カリカリって、浮き上がった部分に指先を執拗に何度も往復させるんです。

そしてわたしの体から次第に力が抜けてきているのを察知すると、迂闊な胸元の布地をぺろんと引っぺがし、生おっぱいに指をめり

込ませました。指跡がついちゃうくらいの強さで、痛いはずなのにそれがわたしを興奮させます。キャルちゃんったら魔法と同じでやると決めたら大胆になっちゃうんですね。無抵抗なわたしのおっぱいをゴムまりみたいにして弄びます。おっぱい肉をむぎゅむぎゅされるたびにお腹の下が疼いて仕方ありません。溢れてくるものを抑えきれず、ついつい左右の太腿を擦り合わせてしまいます。

もっと強い刺激が欲しい。

そう思ったわたしの足は自然と食卓に向かっていました。みんなで食事をするために、わたしが木を切るところから始めて手作りした食卓。こんなことに利用するのはイケないことだとわかっているのに、わたしは止めることができませんでした。

スカートをたくし上げて裾を咥え、露出したパンティを食卓の角に押し付けてみます。

「んんふっっっ♡」

布越しにクリトリスが擦れた瞬間、思わず悲鳴を上げそうになるほどの快感がわたしの体を駆け巡りました。スカートの裾を咥えていなかったらキャルちゃんを起こしてしまっていたかもしれません。想像以上の快楽はわたしの性的好奇心を大いに刺激しました。快楽でふやけた頭で力加減を調節しながら上下左右に動かします。気持ちいい場所を探すのは美食の探求と同等以上に楽しくてやばいですね。

次第にこなれてきたわたしはクリトリスを中心にリズミカルに、どんどん力強く股間を擦り付けました。普段みんなで食事をしている場所でこんな淫らな行為に及んでいる背徳感がスパイスになっているのかもしれません。

下品なプリンセスでごめんなさい。

でも止まりません。止められません。
発情期のウサギみたいに腰を揺すりながら、おっぱいへの愛撫も再開してしまいます。はしたなく涎を絡ませた指先で敏感になった乳首を擦って、食卓が軋むのも気にせずクリトリスに刺激を与え続けます。
もしかしたらキャルちゃんが降りてくるかもしれない、誰か訪ねてくるかもしれない、そんなスリルすらも快感に変えて、わたしは汗だくになりながら自慰行為に溺れていきました。
おへその内側からジンジンと押し寄せてくる波。固く勃起した乳首を勢い任せに抓ると、ひと際強い波が体中に広がります。
「ンンンんンふむうぅぅっっっ〜〜〜……♡♡♡」
わたしの体は頭のてっぺんから糸を張ったようにピンッとなって一瞬硬直すると、小刻みに痙攣を始め食卓に突っ伏してしまいました。脳みそが湯煎されたみたいに蕩けていてぼんやりしますね。それに全力全開で王家の装備を使った後みたいな気怠さを体が支配しています。
しばらくひんやりとした木の温度を肌に感じ、呼吸を整えたわたしの頭は少し冷静になってきました。
太腿は愛液でびちゃびちゃになって冷たいですし、スカートの裾を咥えていた口の周りも涎塗れです。それに床や食卓も汚してしまいました。
罪悪感で頭をいっぱいにしながら、わたしは急いで身なりを整えて後始末をしました。
しかし、その後も体の疼きが残っていたわたしは自室にこもってお昼近くまで自慰行為

に夢中になってしまい、わたしにしては珍しくお昼ご飯を食べずに夕方まで眠りにつくことになるのでした。

第四話　求め合う二人

今朝は自分自身を慰めることで体の疼きを辛うじて発散したペコリーヌとキャル。
しかしそれはあくまで一時凌ぎの対症療法に過ぎなかった。彼女たちを発情させる魔力波動の根源である『淫花の宝珠』は未だに【美食殿（びしょくでん）】のギルドハウス内でその効果を発揮し続けているのだ。特に宝珠の設置場所であるリビングで受ける影響は計り知れない。二人の少女の体の疼きはもはや今朝の比ではなくなっていた。
表面上は平静を装って夕食を済ませたものの、リビングに滞在しすぎたせいですっかり発情しきっていた。彼女たちのどちらかでも冷静な判断力が残っていれば、リビングを離れて自室に戻るという行動が取れたはずだ。
そうならなかったのはお互いにこの後起きる事態を無意識に期待していたからなのだろう。
キャルがペコリーヌの髪をかきあげたり、胸元のネクタイを無為にパタパタさせる仕草を見る目はケダモノのそれであったし、ペコリーヌがキャルのそういった視線を敏感に察知して体の内側を熱くしていたのもそうだ。
つまりきっかけはなんだって良かった。
「はい、キャルちゃん♪　あーん」
リビングの一画のミニ書斎のソファーに隣り合って座るペコリーヌとキャル。
ペコリーヌが皮を剥いたみかんをひと房摘まんでキャルに食べさせようとしている。過

去のシチュエーションを考えると、熱々のご飯や謎の虫料理を口の中に突っ込まれたりしていて碌な目に合っておらず受け身になりがちなキャルであったが、今回ばかりは話が違った。

「ちょっ、キャルちゃん……！？」

キャルは差し出された果実をペコリーヌの指ごと口に含んだ。果実を素早く口内ですり潰して食道に流し込み、舌の上に甘酸っぱさを残したままペコリーヌの細長い人差し指に吸いつき舐り始める。爪の間、関節の溝の隅々まで汚れを削ぎ落すように丁寧に舌を這わせ、唾液を細胞の奥深くにまで染み込ませていく。

「んちゅ♡　ちゅば、れろじゅ♡　ぴちゃぴちゃ、んぁむっ♡　むぢゅるる～♡」

「ひぅっ、キャルちゃ……んっ♡　それ、はぁ……めっ、ですよぉ……♡」

キャルの口撃に不意を突かれたペコリーヌは思わず甘い声を漏らしてしまう。唇の形に酷似した果実を摘まんでいたら、本物の唇に指を摘ままれた。ざらついた舌の感触と柔らかな唇の吸いつきのコンビネーションは性感帯ならざる部位を性感帯と錯覚させてしまうほどだった。

「んっ……ぷふぅ……♡」

ある程度ペコリーヌの指を堪能してから、キャルがようやく指から唇を離した。艶めかしく光る粘液の糸だけは名残惜しさを表現するように唇と指を繋いでいる。

「まだ……足りない……」

「キャルちゃん……」

「足りないの……！」

何もかも諦めて地べたを這いつくばっていた時に見えた光。あまりにも眩しくて、眩し過ぎて、大嫌いな輝き。キャルにとって彼女の存在は太陽のようだった。受け入れ難い、受け入れてはならない愛おしさが溢れ出す。

だからこそ……穢してやる太陽なんて。

ペコリーヌが思わず顔をしかめるほどの力で肩を掴むキャル。

「ペコリーヌ……！」

そのまま覆いかぶさるようにペコリーヌを押し倒して唇を奪った。

ペコリーヌの目は一瞬驚きに見開いたが、すぐに状況を受け入れて瞼を閉じる。強引にねじ込まれた舌を歓待するように舌を絡ませて薄まりつつある果実の甘酸っぱさを味わいつくした。口内の交わりの中でお互いの唾液を何度も何度も送り合い、相手の粘膜に自身の劣情を染み込ませようと、いやらしい水音をぴちゃぴちゃと部屋中に響かせる。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

実際にはほんの数分、彼女たちの中では永遠にも近い時間の接吻は呼吸の限界を迎えて終了した。口の周りをお互いの唾液でべちゃべちゃにして息を荒げているキャルは唇を離してペコリーヌの表情を窺う。

発情しきった様子で顔を紅潮させ、物欲しそうに舌を突き出すペコリーヌ。潤んだ瞳が非常に色っぽく、キャルのほの暗い劣情をさらに煽ってきた。

肺いっぱいに空気を溜め込むとキャルは再びペコリーヌの唇に飛びこんだ。突き出された舌に唇を吸いつかせ、しごくように前後させる。いわゆる舌フェラだ。正直者だけど嘘つきでもあるペコリーヌの舌を引き抜かんばかりに、閻魔の吸引力で責め立てた。先ほどまで可愛らしさがあった水音も濁流のごとく激しさに変化している。

食い荒らすような勢いで唾液をまき散らしながらペコリーヌの唇を犯す姿は完全に野獣のそれであったが、犯されているペコリーヌにとっては体の芯を熱くするスパイスでしかない。荒々しくも情熱的なキャルのキスを堪能した。

「んはぁ……♡　キャルちゃん……嗅いじゃダメですよ♡」

唇の次にキャルが突入したのはペコリーヌの豊満なおっぱいだ。激しいキスのおかげで涎が垂れてぬらぬら光る胸の谷間。その艶めかしい輝きに惹かれるのも無理はなかった。

谷間に染み込んだ汗の雫に舌を這わせて拭き取りながら、両手で寄せるようにおっぱいを揉みしだく。服の上からも確かな手ごたえを感じさせる乳肉の弾力に興奮を隠せず、キャルは夢中になって顔と指を埋めた。

鼻孔にペコリーヌの濃い体臭を吸い込んで脳髄に直接興奮剤を注がれたような状態で、手のひらいっぱいにおっぱいの感触をしまいこむように愛撫する。シュークリームの中のクリームのように指の隙間から逃げ出そうとするたぷんたぷんのおっぱい肉。新たな世界の法則を発見したツンデレ猫娘は、目をギラギラ輝かせながらおっぱいを捏ね回した。

「ふぁ♡　んくっ♡　キャルちゃん……キャルちゃん……♡」

鼻息を荒くして自分のおっぱいを愛撫するキャルの姿がたまらなく愛おしいペコリーヌは彼女の名を何度も呼びながら、子供をあやす母親のように頭を撫でた。一見落ち着いて

いるように見えるが、その裏側ではキャルに負けないくらいの愛欲が渦巻いているのは言うまでもない。それに呼応するように彼女自身の体温も上昇して衣服が邪魔に感じてくる。

「キャルちゃん……♡　熱くないですか……？」

敏感な耳元で艶っぽく囁いてやると、キャルは慌てて飛び退いた。その隙に身を起こすと勿体ぶったように胸元の布地を捲る。パッションあふれる弾力と、ほんのりキュートなピンク色が彩ったおっぱいがまろびでた。

そのおっぱいの王族的な美しさを前に、先ほどまでむしゃぶりついていたにもかかわらず、キャルはひれ伏しそうなほど気圧されてゴクリと息を呑む。

そんなキャルを横目に、ペコリーヌは優雅な仕草で衣服を次々と脱ぎ始めた。本来なら賤民が決して拝むことはできないプリンセスのストリップショー。そこにだけスポットライトが当たっていると錯覚するほど輝かしい裸体を目の前にして、キャルは戦慄にも等しい高揚感を覚えていた。

「キャルちゃんも脱いでください♡　わたしだけ恥ずかしいじゃないですか♡」

うつむき加減にそう呟くペコリーヌにドキドキしながら、キャルは慌てて衣服を脱ぎ捨てる。ペコリーヌとは違い、優雅さのかけらもなく行儀の悪い脱衣だったが、それにすらペコリーヌは好感を抱いていた。

「ペコリーヌ……あたし、あたしは……！」

「キャルちゃん、きて……♡」

ソファの上でお互いの太腿を股で挟みこむようにして抱き合う二人。相手の温もりと鼓動を肌で直に感じて、淫らな感情はさらに高まっていく。

「あっ♡　キャルちゃんの乳首と、んふっ、わたしの乳首が……チューしちゃってますね♡　んちゅ♡」
「はむちゅ、れろっ♡　くふっ♡　ん、口に出すな……っん……バカぁ♡」
　啄むようなキスの応酬を繰り広げながら、小刻みに体を揺すり、敏感な突起同士を擦り合わせて快感に酔いしれる。そしてキャルの慎ましい乳房が、巨乳のヤンデレからも胸が大きいと称されるペコリーヌの巨乳に呑み込まれた。極上のプリンセスバストは口が汚い女の胸元でいやらしく形を変化させ、蕩けるような柔らかさと温もりを生み出している。おっぱいの押し相撲は自分が優勢とお調子に乗ってきたペコリーヌはさらに乳圧を掛けようと、大きく体をグラインドさせた。
「ひゃあぁぁっ……♡」
　自身の秘部がキャルの膝に乗っていることを失念していたため、グラインドの勢いがそのまま性感帯に直撃した。クリトリスに想定外の圧力がかかり、背を弓なりに仰け反らせるほどの快感がペコリーヌを襲う。
「ふふ～ん」
　この機を逃すキャルではない。持ち上げる要領で膝にきゃるんと軽く力を込めて左右に揺さぶってやる。そのたびにペコリーヌの体がビクンと跳ね、大きな乳房が震えた。
「はあ……んっ♡　キャルちゃん……そん、な……はげしく、しちゃ……だめですよ……♡」
「ふんっ、何言ってんのよ？　あんた、自分でも腰動かしてるじゃない」
　キャルの手をしっかり握りしめながら、腰を止めることなく彼女の膝に陰核を擦り続け

ているペコリーヌ。キャルの動きに合わせて自分の気持ちいい場所を探求しているようだ。
「だって、えぁ、くっ……きもち、いいんです……♡」
「あ、あんたがそんな顔するから……あたしも……♡」
普段のペコリーヌからは考えられないほどの媚びたエロ顔を見せつけられ、キャルのほうもさらに高ぶっていく。内股気味にペコリーヌの引き締まった太腿を強く挟みこんでクリトリスをノックするように擦り付け始めた。ちょうど屈伸するような感覚だ。とんとん、とんとん、最初はメトロノームのように正確なリズムを刻む。少しずつ快感に慣れてきたところで、今度はペコリーヌの鼓動に合わせて揺すっていく。
「んっ、ふぅ♡　くっ……あ、んんっ♡　ペコリーヌ……♡」
「あはぁ♡　キャルちゃんっ♡　キャルちゃんっ♡」
お互いの存在を確かめ合うように、体を揺する動きはより熱烈なものになっていった。股間から溢れるラブジュースが脚を伝って、二人の振動で軋むソファの上を湿らせている。
「はぁ、はぁ……♡　キャルちゃん……もっと♡」
「ふーっ♡　ふーっ♡　ん……あたしも……！」
ほとんど動きのない太腿に陰部を擦り付けているだけでこのありさまだ。もっと繊細な動きができる部位で触れ合ったらどんなことになるのだろう。淫靡な魔力の波動を浴びた心と体がさらなる刺激を求めていた。
二人の好奇に満ちた欲望によって、固く握りしめ合っていたその手がお腹をたどって下へ下へと降りていく。
「ひっ、あぁん♡」

キャルが指先を太腿の付け根に割って入れるのと同時に耳たぶを甘噛みしたので、ペコリーヌは本能的に身を縮めて叫んでしまう。太腿を何度かさすってからプリンセスの秘められた場所へ指を進めていく。行儀の悪い指は、デルタからするりとその内側にもぐりこむ。そこで、指先がくいくいと動いた。

「は……あぁ♡　くっ、あん、ひゃ、キャル、ちゃ……やっ、はあぁ……♡」

キャルの指がペコリーヌのぬかるんだ愛液をすくっては肉ひだを挟みつけ、圧迫するように押し付ける。繊細で滑らかな指の動きがクリトリスに伝わって、ペコリーヌは腰を浮かせて悶えてしまう。

「あんたの、ココ……すっごい吸いついてきたわよ。それに、こんなに濡らしちゃって……」

「あっ……もうっ、キャルちゃん……見せないでください……！」

彼女の内側で蠢いていた指先を眼前でちょきちょきして見せる。変色したように濡れた指の間では透明な糸が引いて輝いていた。

「んふっ♡　見せないで……じゃなくて、やめないで、でしょ？」

「ふあっ、それ……それ、あっ♡　きもちいい……れす♡」

キャルは羞恥に震えるペコリーヌの耳の内側をぺろりと舐めると、再び指を秘所にもぐらせて濡れた肉ひだをこねくり回し始める。

「あたしの指で……こんなに……感じてるんだ♡」

自分の手で悶えるペコリーヌの姿を眺めながら、キャルはある種の支配欲が満たされるのと、自分の奥深く熱いものがにじみ出てくるのを感じていた。温泉を掘り当てたがごと

く、ペコリーヌの内側から愛液が湧き出てくるのを直に受け止めて指を濡らしつつ、自分自身もそれ以上に濡らしているのだ。

「んぁ♡　キャルちゃぁん……♡」

快感に悶えていたペコリーヌがキャルの耳元に頬を寄せる。

「はふぅ……♡　わたしばっかりきもちよくなっちゃってますね……キャルちゃんにも、いっぱい、いっぱい、感じてほしいです♡」

キャルの耳元にふっと息を吹きかけたのを合図にペコリーヌの攻勢が始まった。

よわよわな耳元に不意打ちを仕掛け怯んでいる隙に、素早く猫耳娘の秘所に指を滑り込ませると、クリトリスをつついたりつまんだり、泉に指先をひっかけたりして刺激を与える。すでにぐしょぐしょに濡れそぼっていた肉ひだの奥から、さらに濃い液体が流れ出してくるのがわかった。

「うっ……ひああっ……♡　はっ……ちょ、んあっ……♡　へやあっ……ペコリーヌっ……！」

「ふふっ、たっぷり濡れてますね♡　キャルちゃんもいっしょ……♡」

ほじればほじるほど溢れ出る愛液を絡ませながら、ペコリーヌは性格同様にキツキツの秘部を掻き回す。ずっと握り合っているキャルの手に力がこもるのを感じて胸がキュンとなった。

しかしキャルもやられっぱなしではない。内側からの快楽に身を震わせながらも、ペコリーヌを責め続ける。本人同様やたらとグイグイ締め付けてくる秘部の抱擁を指先に受け、愛おしさに気が狂いそうになっていた。

「あひっ、あん……キャルひゃん♡　キャルひゃんっ……♡」
「ペコ……リーヌっ♡　んくっ♡　ふぉ……くっ……あぁ……ペコ、リーヌ……♡」
快楽で頭がふわふわして思考力が落ちてきているにも関わらず、相手を責める指先だけは自律しているかのように明確な意志をもって的確に動き続けていた。
指の肉が溶け落ちてしまいそうなほど熱くぬかるんだ秘められし泉。お互いの指が抱擁されている具合でこみ上げてくるものを感じ取っていた。
もうガマンなんてしていられる状態ではない。
二人して腰を浮かせて、両脚に力がこもっていた。お互いの指がピストン運動を繰り返しながら奥へ奥へと突き進んでいく。
「あっ、そ、れっ……あ、くあぁ……あたし、もう、あたしっ……♡」
ヒップの肉まで緊張してきて、ぶるぶる震える身を寄せ合う。
「あ、あっ、はっ……き、キャル、キャルちゃ……ぁん♡　ひっ♡　き、キ……ス、して……キスぅ……♡」
口の端から涎を垂らしながら唇を突き出してキスをねだるペコリーヌ。キャルは首を小刻みに動かして頷くと、ほとんどぶつかるような勢いでプリンセスの唇に吸いついた。
「あむちゅ♡　れろっ♡　じゅぱ……んぢゅ、んむっ♡　はぷっ、あん、じゅる……♡」
「ちゅ♡　ちゅぷ、ぇろ……くじゅ……っはあ……♡　ひゃる♡　んっ……キャル……ひゃぁ……はむっ♡　んじゅ、ふぅむ……♡」

酸欠になっても構わない。
発情しきって愛欲に蕩けた二人の脳みそは全身に全力全開で相手と結ばれることを要求していた。
片方の手は恋人繋ぎで指をぎゅっと握って、もう片方は大事な部分に抱擁されて、唇は粘膜の境界が不明瞭になるくらい絡み合っている。
喉奥から搾り出される喘ぎ声、口内で唾液が掻き回される交響、乙女の泉から熱烈に愛液が迸る水音、そして心臓の鼓動。
それら全てが内側に伝導して、こみ上げてきていた快感を増長させる。
（キャルちゃん♡　キャルちゃん♡　キャルちゃん……♡）
（ペコリーヌッッッ……♡　あんたは……あたしの……♡）
最高潮にまで膨れあがった快感が頭のてっぺんから足の先まで一気に駆け抜けていく。
鮮烈な刺激で一瞬体が硬直した後に、全身を震わせて奥から熱い液を流しながら二人は達した。
「はぁー、はぁー、んぁ、あ、あたし……もう……」
「わたしも……」
先に力尽きたキャルがペコリーヌの方へと寄りかかる。しかしペコリーヌの方もキャルと状態は変わりなかった。そのまま二人とも抱き合うようにしてソファの上に倒れ込んでしまう。
二人ともほとんど真っ白になった頭の中は愛おしい相手のことで満たされていた。限界を超えて快楽を受け止めた肉体は穏やかな空気の中で安らぎを迎える。お互いの温もりを

肌に感じながらプリンセスたちは眠りにつくのだった。
ここで終わりだったならば事は大きくならずに済んだだろうが、残念ながらそうはならない。
こうなってしまった諸悪の根源たる『淫花の宝珠』がその魔力を増して稼働を続けていたからだ